

川崎市域鶴見川水系でハグロトンボを確認

Calopteryx atrata Selys Recognized within the Tsurumi River System, Kawasaki City Region

雛倉正人

Masato Hinakura

前回の第6次川崎市自然環境調査において、筆者と共著者の岩田芳美は、市内のトンボ類の記録を報告した。この中で、ハグロトンボ *Calopteryx atrata* Selys について、多摩川と繋がった水系で確認され、その他の水系からは確認できなかったと記している（雛倉・岩田，2007）。今回筆者は、鶴見川水系（多摩川水系とは異なる）の麻生川と片平川において、ハグロトンボを見出したので記録しておきたい。

1♂撮影 麻生区古沢麻生川 2008年7月6日；1♀撮影 麻生区片平 2008年8月10日（川沿いの竹藪にて）

1♂撮影複数個体目撃 麻生区片平片平川 2008年9月4日（図1, 2 同時に、オニヤンマ *Anotogaster sieboldii* (Selys)の産卵に遭遇、撮影した）

1♂撮影複数個体目撃 同所 2009年6月30日

筆者は、2005年春より5年ほど片平川付近の住宅地に居住したが、転居当初は確認できなかったハグロトンボの成虫を、2008年以降2年連続して確認した。川の右岸側は市街化調整区域であり、緑地が町田市方面に続いている。また、麻生川の確認地点は新百合ヶ丘の中心街付近であるが、背後には古沢の樹林地がある。ここでは2008年に成虫を確認した。データや確認状況は上記のとおりである。片平川の確認地点で注目すべき点は、局所的にガマなどの水生植物が植栽されていることであり、人工の場所ながら、水生生物がわずかに生息可能な場所ができたため、本種が定着した可能性が考えられる。

麻生川・片平川は、住宅地を流れる典型的なコンクリート護岸の都市河川である。前者は両岸が桜並木に覆われているが、どちらの河川も水際に土や植生はほとんど無い。片平川源流部の栗木地区は、かつては水生生物豊富な谷戸であったが、1980年代後半にマイコンシティの造成により暗渠になり、当初の痕跡は無い。

筆者が確認している同じ水系で最も近い本種の生息地は、鶴見川の支流である町田市の真光寺川（能ヶ谷・広袴地区）である。また、麻生区黒川地区の三沢川（多摩川水系）にも本種の生息が確認されており（雛倉・岩田，2007）、下流の稲城市域でも筆者は目撃している。どちらも、水際に土と植生のある河川である。ハグロトンボは、沈水植物などの組織内に産卵し、流水中で水生の小動物を食して育った幼虫は、初夏に羽化して周囲の樹林地などで過ごし、成熟個体は水辺に戻って繁殖活動を行うことが知られている。土と植生の無い河川には、通常生息できないと考えられるので、近隣の生息地から、丘陵地や川を伝って成虫が移動してきた可能性が高い。



図1 ハグロトンボ



図2 ハグロトンボが確認された麻生区の都市河川

参考文献

雛倉正人・岩田芳美，2007．川崎市のトンボ類の記録．川崎市自然環境調査報告VI：267-271．

著者紹介

雛倉正人 特定非営利活動法人かわさき自然調査団 昆虫班・水田ビオトープ班